

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

「私の母」

開成町立文命中学校

三年 三 鬼 桃 華

私の母は目が不自由である。小学生の頃から母の目の不自由さを身近に感じて育った私は、家族の中で福祉の重要性を深く理解する機会に恵まれた。母が障害を持ちながらも日常生活を送れるのは、母自身の努力だけでなく、周囲の支えや福祉制度の恩恵があつてこそであると強く感じている。

母が視力を失つたのは、私が小学生の頃だった。最初は一部の視力が低下し、その後、徐々に失明へと進行していった。この状況は家族にとつて大きな試練であつたが、母は決して自分を諦めず、私たち家族に対しても決して弱音を吐かなかつた。しかし、目が見えなくなるという事実に向き合う中で、私たち家族はさまざまな困難に直面することになった。

日常生活での小さなことが、大きな障害になることを痛感した。例えば、母が料理をする際、見えない中で刃物を使用したり、火加減を調整するのは危険を伴う。家の中を移動する際にも、家具にぶつかったり、足元にある物につまずいたりすることが頻繁にあった。私たち家族は、母を支えるためにできる限りのサポートを提供してきたが、それだけでは十分ではなかった。

そんな中で、福祉制度が母と私たち家族にとって重要な助けとなった。まず、自立支援医療費助成は、母が通院している医療費を負担してくれる。次にサングラスと白杖を買う際の補助金などが母だけでなく私たち家族にとっても助けとなった。さらに、家族としても、家中の環境をどのように整えるべきか、母が自立して生活するために必要なサポートは何かを具体的に理解することができた。例えば、家の中の段差をなくす、明るさを調整するための照明を取り付ける、また、音声案内がついた電子機器を導入するなど、小さな工夫が母の生活の質を大きく向上させた。

母はお米を炊いたり、洗濯物を畳んだりと自分のスキルを活かした家事を行ったりしている。母は、自分の障害を悲観するのではなく、逆にそれを新たな挑戦と捉え、福祉の力を借りながら前向きに生きていく道を選んだのである。

この経験を通じて、私たち家族は、福祉が単なる助け舟であるだけでなく、個人の尊厳を守り、自己実現を支えるための重要な役割を果たしていることを実感した。

母のように視覚障害を持つ人々が、自立した生活を送れるようにするためには、福祉制度の充実とそれを活用する意識が不可欠であると感じる。私自身も母を通じて得た経験を他の

人々に伝えることで、福祉の重要性を広めていきたいと考えている。障害者が抱える困難は、決してその一人一人で解決できるものではなく、社会全体で支えるべき問題である。そして、その支えがしっかりとしたものであるほど、障害を持つ人々はより豊かで充実した人生を送ることができるのだ。

福祉の力によって、母は目が不自由でありながらも、多くの人々と同じように自立した生活を送っている。その姿は、私にとって誇りであり、また福祉の大切さを教えてくれるものだ。今後、母を支えるだけでなく、社会の中で福祉の重要性を伝え続けていきたいと思う。